様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７８０５２５

研究課題名（和文）国語科教育におけるメディア・リテラシー育成のための学習論構築に関する基礎的研究

研究課題名（英文）a basic research on building a learning theory for encourage media literacy in japanese language education

研究代表者
砂川　誠司（Sunagawa, Seiji）

愛知教育大学・教育学部・講師

研究者番号：２０６４７０５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、国語科におけるメディア・リテラシーの学習論の構築をめざして、現代英米の国語科教育論におけるメディア・リテラシーの議論を考察し、「集団としての学習動機」について、その内容と実践への組み込まれ方について明らかにした。また、国語科において写真を用いた学習プログラムを開発・実施し、写真メディアの解釈に強いこだわりをもつ学習者の実態を明らかにした。さらに、メディア・リテラシーの評価問題の事例分析を試み、その課題を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, I examined a discussion of the media literacy in the modern British and American language arts education theory for the construction of the learning theory of the media literacy in language arts. And I clarified "the learning motive as the group" and discussed embedded one to the practice.In addition, I developed the learning program using the photograph in Japanese language education and carried it out and clarified the actual situation of the learner who had the feelings that were strong in interpretation of the photograph media. Furthermore, I tried example analysis of the issue of evaluation of the media literacy and clarified the problem.

研究分野：教科教育学

キーワード：メディア・リテラシー

１．研究開始当初の背景

我が国の国語科教育論においてメディア・リテラシーの議論は 2000 年に入って、にわかに活発になった。これは特にカナダのメディア・リテラシー教育についての紹介を機に、また国内における報道機関に対する認識の変化、かねてからの情報化の議論など複雑な要因を背景に登場したものであり、2000 年に入って突然始まったものではない。ところが国語科におけるメディア・リテラシー教育はその重なり合う原因を背景にいわば盲目的に行われてきたとさえいえるものであった。こうした状況からおよそ 10 年近く経た現在、メディア・リテラシーという用語はもはや一時の流行であったというような印象さえ受ける。しかし国語科においてメディアを用いることは、学習者に身近なことばと向き合い、コミュニケーションツールとしてことばのあり方への認識にアプローチするもののはずであり、そうした面からの「リテラシー」の育成に関わるということであるはずである。こうした可能性を十分に持つメディアの活用は、これからの情報テクノロジーの高度な発展のなかで国語科教育を考えるうえで、ますます重要になることは間違いない。

こうした状況を踏まえ、国語科教育の議論のなかでも、羽田潤(2012)、瀧口美絵（2011）、奥泉香（2010）などの研究は、国語科におけるメディア利用の基礎を確実とするための試みを続けており、それらは近年着実に成果を挙げつつある。こうした研究の蓄積のうえに上記のようなアプローチの原理的な見解が得られようとしている。筆者も、2011 年に、『国語科におけるメディア・リテラシー観の探究』として、これまでの研究をまとめ、博士論文として提出した。この論文のなかでは、我が国の国語科教育はもとより、英米の国語教育論をも参照しながら、上記の問題を解決すべく、個々の取り組みの国語科教育学への位置づけを可能にする理論の構築をめざし、論を展開した。

この論文のなかで、アメリカのメディア教育論者である Henry Jenkins の理論を扱った。彼は子どもたちが ICT の利用をもって「参加型文化」と彼が呼ぶ文化を形成していると論じ、そのなかで子どもたちの「読み」は本をひとりで黙読するという形態だけではないものが現れてきていることを論じている。そのうえで、彼はさまざまなかたちでその「読み」を活用した授業のあり方を探っている。彼の理論は何もメディア教育の文脈だけで語られるものではない。Robert Dale Parker（2012）は、『文学をどう解釈するか（How to Interpret Literature)』のなかで、新批評（New Criticism）や構造主義（Structuralism）などと並列して読者反応理論（Reader Response）を取り上げているが、この中に「読者と新しいテクノロジー」と題して Jenkins の論が引かれており、彼の論が読者反応理論の一部を確かに形成していることがわかる。読者反応理論は、我が国においては特に山元隆春（主に 1998、2005）によって積極的に紹介・考察されてきた。これによって子どもたちのテキストの理解方略やその発達などが解明されるなど、山元の国語教育学に対する功績は大きいものがあり、読者反応理論をより深めていくことは我が国の国語教育にいまだ重要な仕事である。ただし山元の関心は主に文学教材に向けられており、視覚メディアが中心となる絵本についての考察も近年はなされつつあるけれども、テクノロジーに関する考察はわずかであり、メディアの活用についての理論構築はいまだ発展の可能性を残している。

２．研究の目的

以上のような背景から、本研究は国語科におけるメディア・リテラシー育成のための学習論の構築をめざして、現代英米の国語科教育論におけるメディア・リテラシーの議論を詳らかにすることを目的とした。これによって、国語の授業においてメディアを使うということが学習者のどのような反応を促すかということの解明、および国語学習にいかにメディアが統合されるべきかについての知見の蓄積、さらにそれらを統合した形で国語科におけるメディア・リテラシー育成のための学習論の構築を行う。

３．研究の方法

本研究においては文献調査が基本である。メディア教育研究、および国語科教育研究を対象とすることから、それに関係する諸論文、諸書籍の収集・整理・考察が中心となる。それらは、周辺の諸領域（批評理論、発達心理学、教育学など）を複雑に取り込むかたちで形成されていると考えられるので、そうした諸領域の関係文献も調査の対象とする。手順としては、

（１）理論系文献の調査・考察
（２）実践系文献の調査・考察
（３）それらをまとめた国語教育学への援用についての考察

の順に行った。

４．研究成果

研究開始の直後、Henry Jenkins らの著作「Reading in a Participatory Culture」が出版された。これは、米国の国語の授業（高等学校）において『白鯨』をメディアを活用しながら読ませる実践である。Jenkins らの目的は、彼が参加型文化と呼ぶ現代の ICT 環境において形成されている文化的現象を教室の中に有効なかたちで取り込むことにある。本研究における理論面での検討としては、この著作の検討を中心的課題として、国語科におけるメディア・リテラシー教育を開発していくにあたって、「読者コミュニティ」およびその成立を助ける「集団としての学習動

機」に着目した。Jenkisn らは、「読む」ということを以下の観点からモデル化している。

① 読み手は書き手でもある
② 「作者の意図」は、広範な協働的文化とやり取りする作者を捉えるために、もっと広く定義される。
③ 「読むこと」は、批判的で創造的なさまざまな実践の包括的用語である。
④ 文学作品は、歴史的観点から考えたものや現代的視点を反映させたもなど、多様なバージョンのある流動的なテクストである。
⑤ 読むことは社会的な意味創造活動である
⑥ 教師と学習者はともに熟達者であり未熟者である。

そして、こうしたモデルを構成する「参加型実践」を次のように定位する。

① 読むことの動機：アイデンティティ発達と協働的知識創造の行為としての読むこと
② アプロプリエイションとリミックス：リミックス実践を受け入れ、特定し、成り立たせること
③ 文化的空間を切り抜けること：社会的な考えを明らかにし、複雑な文化的コンテクストのなかを柔軟に進んでいくこと
④ 持続性と沈黙性：テクストの構成要素を調べるストラテジーを発達させること

このうち、「読むことの動機」で扱われることがらが、学習を構成する最も重要な位置づけを担っていると考えたのである。

近年の学習論を構成する原理として、社会構成主義的アプローチを挙げることができる。これは学習が個人的な思考によって構成されるだけではなく、社会的な関わりによっても構成されていくというものである。ヴィゴツキー理論の再評価とともに、そうした学習のあり方を探ることが国語科教育研究においても課題となっており、グループ活動や話し合いの組織について検討が進められている。こうした研究と並行の関係を取り結ぶメディア・リテラシーの学習が「Reading in a Participatory Culture」においても示されていると考えられる。とくに、実践開発において心理学的な議論のベースを担っている Daniel T. Hickey の理論から実践を捉える枠組みを援用し、「読者コミュニティ」の成立の条件を以下の 5 点に整理した。

① アイデンティティと読むことの動機の関係の理解
② 複数のアイデンティティが読むことを営む自己を構成するということの理解（読者としての自己理解）
③ テクストを理解する道具の習得
④ １～３の様子を共有することによる、協働的実践の価値の理解
⑤ ファンコミュニティーに見立てた読者コミュニティ概念の理解

このうち、１と２に「Reading in a Participatory Culture」のインターネット上における指導書「教師用戦略ガイド」の動機づけの対象は集中する。それは「読者コミュニティ」をなぜつくらないといけないのかということ、それもなぜ教室内でつくらなければならないのかということそのものを学習者たちに問うていくアプローチであり、「集団としての学習動機」を教室に形成するものである。集団としてのアイデンティティの保ち方と個人としてのアイデンティティの保ち方の間にある葛藤を他者とのやりとりの中で調整される場が、学習のはじめに構成させられていることになる。

こうした学習構成が必要であることは、実際に国内で行った実践においても見えてきた。本研究の一貫として、愛知教育大学附属名古屋中学校において、3 年生のクラスを対象に 2013 年 6 月の第 2、3 週のあいだ、「一枚の写真を読もう」という単元を設け、実践を行った。そこでは、写真テクスト分析を詳細に行う学習者の姿が見られたが、なかでも解釈に強いこだわりをもつ学習者の存在が浮き彫りになった。ワークシートの記述や授業内における発言から、その学習者が他者の意見を聞き入れつつも、自らの解釈を固く手放そうとしない。それは、真に表われたいくつもの要素を解釈し、複合的にそれを組み合わせてひとつの主題を導くという思考の流れが、学習者に一貫性への要求を大きくし、解釈を固持させたのだと考えることができる。つまり、写真テクスト分析方法そのものがもつ解釈へのこだわりである。しかし、これは「「作者の意図」は、広範な協働的文化とやり取りする作者を捉えるために、もっと広く定義される」ことや、「「読むこと」は、批判的で創造的なさまざまな実践の包括的用語である」といった参加型の読みのモデルとは異質なものでもある。いかに教室内における学習を「読者コミュニティ」の成り立つ場として考えるか、そしてそのための「集団としての学習動機」をいかに調整することができるかという点が実践開発における課題として挙げることができる。

最終的に、本研究は学習を意味あるものとしてまとめるために必要な評価の問題に取り組んだ。この点に関しては、英国の評価試験問題（GCSE）を分析・検討した。中心的に検討した問いは記述式、あるいはデザインというかたちで表現することを求める問題であるが、評価される中心はあくまで表現されるメディアに対する知識理解のあり方であった。そして、その知識理解はメディア・リテラシー教育が目標とする批判的な思考を直接的に問うことから判定するようなものではないものであった。そうではなく、創作

的な活動を行わせるなかで、提案の「効果」の記述として現れるのである。したがってそれらに対するメタ的な認識がどのようなものであるかは明確に問うてはいない。この点をいかに捉えるかが大事な観点になると考えられる。

本研究で明らかにしてきたことは、メディア・リテラシー教育の学習を構成する原理として、以下にまとめることができる。

・アイデンティティと読むことの動機の関係についての理解に学習者が意識的になること
・複数のアイデンティティが読むことを営む自己を構成するということの理解をもたらすこと
・視覚的メディアのテクスト分析は、方法論によって学習者に強いこだわりを持たせてしまうこと
・創造的な活動における評価指標を開発すること、また、その際にはメタ的認識を問うべきであること

本研究では視覚的メディアとして写真を中心的な教材として扱った。もちろん、異なるメディアであれば異なる学習の原理が導かれることになると思われるが、多様なメディアを一括りにして扱うことは注意しなければならない。上記の学習構成の原理は、さらに具体的なメディア教材においていかに実現可能であるかということについて詳らかにすることが必要である。国語学習にいかにメディアが統合されるべきかという本研究の目標も、その考察とともに十分に達成されることがらであると考える。

〈主要参考文献〉

① 石田喜美（2013）「メディア・リテラシー教育における倫理的側面―The Goodplay Project & Project New Media Literacies(2011)Our Space を手がかりとして―」（『国語科教育　第73集』全国大学国語教育学会、pp.15-22）
② 上田祐二（2013）「メディア教育、リテラシーにおける理論に関する研究の成果と展望」（全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書、p.399）
③ 羽田潤（2012）『イギリス国語科教育におけるメディア・リテラシー教育の研究―マルチモーダル・テクストの活用を中心に―』、学位請求論文、広島大学大学院教育学研究科
④ 瀧口美絵（2011）『メディア教育史研究―国語科メディア教育の構築に向けて―』、学位請求論文、広島大学大学院教育学研究科
⑤ 奥泉香（2010）「映像テクストの学習を国語科で行うための基礎理論の整理―選択体系機能文法を援用した試み―」（『国語科教育』、第68 集、pp.11-18）
⑥ 砂川誠司（2011）『国語科におけるメディア・リテラシー観の探究』、学位請求論文、広島大学大学院教育学研究科
⑦ 増田ゆか・松山雅子（2012）「表現メディアの違いに着目した中学校国語科実践の考察―写真と言葉を組み合わせた「ことわざ辞典」の制作を通して―」（『大阪教育大学紀要　第Ⅴ部門　教科教育 』61号１号、pp.23-39）
⑧ 森本洋介（2014）『メディア・リテラシー教育における「批判的」な思考力の育成』、東信堂
⑨ リチャード・ビーチ、山元隆春訳（1998）『教師のための読者反応理論入門―読むことの学習を活性化するために―』、渓水社
⑩ 山元隆春（2005）『文学教育基礎論の構築―読者反応を核としたリテラシー実践に向けて』、渓水社
⑪ Robert Dale Parker（2012）How to Interpret Literature:Critical Theory for Literary and Cultural Studies, Second Edition, Oxford University Press.
⑫ Henry Jenkins, et. al(2009) Conftonting the Challenges of Participatory Culture: Media Education for the 21st Century. Cambridge, Mass:MIT Press.
⑬ Jenkins, H. & Kelly, W. (Eds.), (2013) Reading in a Participatry Culture: Remixing MOBY-DICK in the English ClassroommTeachers, College Press
⑭ Daniel T .Hickey(2011) “Participation by Design; Improving Individual Motivation by Looking Beyond It” in Dennis M. Mclnerney, Richard A. Walker, & Gregory Arief D. Liem(eds) Sociocultural Theories of Learning and Motivation, Information Age Publishing, pp.137-161
⑮ AQA（2012-2014）Past papers and mark schemes, and Teacher Resource Bank: Exemplar Script.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5　件）

① 砂川誠司、国語科におけるメディア・リテラシー教育の評価に関する研究ノート―GCSE 試験問題（AQA2012）についての事例研究―、国語国文学報、査読無、74、2016、47-62
② 砂川誠司、国語科メディア・リテラシー教育実践における動機づけの構成―参加型の読みを実現する集団としての学習動機を共有する指導について―、国語国文

学報、査読無、73、2015、53-66

③ 砂川誠司、国定期国語教科書における写真教材の役割、愛知教育大学研究報告：人文社会科学編、査読有、63、2014、17-25

④ 福田充哉・砂川誠司、国語科におけるメディア実践とことばの学び―単元「一枚の写真を読もう」を通して―、愛知教育大学創造開発機構紀要、査読有、4、2014、187-195

⑤ 砂川誠司、メディアを活用した授業における読者コミュニティ成立の条件―Jenkins, H. & Kelly, W. (Eds),(2013) Reading in a Participatory Culture を中心として―、全国大学国語教育学会発表要旨集、査読無、125、2013、31-34

〔学会発表〕（計　2　件）

① 砂川誠司、メディア・リテラシー教育の評価について―英国全国統一試験 GCSE の検討を通して―、愛知教育大学国語教育研究会、2015 年 8 月 28 日、大垣市南地区センター（岐阜県・大垣市）

② 砂川誠司、メディアを活用した授業における読者コミュニティ成立の条件―Jenkins, H. & Kelly, W. (Eds),(2013) Reading in a Participatory Culture を中心として―、全国大学国語教育学会、2013 年 10 月 26 日、広島大学（広島県・東広島市）

〔図書〕（計　1　件）

浜本純逸・奥泉香・近藤聡・中村純子・砂川誠司・中村敦雄・松山雅子・鹿内信善・羽田潤・瀧口美絵・大内善一・草野十四朗・上田祐二・石田喜美・藤森裕治・町田守弘・湯口隆司、渓水社、ことばの授業づくりハンドブック：メディア・リテラシーの教育・理論と実践の歩み、2015、279（39-47）

６．研究組織

(1)研究代表者

砂川　誠司　（SUNAGAWA Seiji）
愛知教育大学・教育学部・講師
研究者番号：72305928